

港とまちの空間構成上の関連に関する史的研究

正会員 東京工業大学 渡辺貴介
○ 正会員 (社)地域振興研究所 水野雅男

HISTORICAL STUDY ON SPATIAL RELATIONS
BETWEEN PORT AND TOWN

by Takasuke Watanabe
Masao Mizuno

概要

港は、従来港町において親密な空間となっていたと思われるが、最近では逆に非常に疎遠な空間となっている。これは、港自体がヒューマンスケールを超越した巨大で冗長で危険な空間となったことも一因であるが、港とまちの機能上あるいは空間構成上の関連が弱まったことも重要な要因であると思われる。本研究では空間構成に視点を据え、港とまちを関連づける方法としてどのような方法があるかを明らかにした。これらの港と町を関連づける方法が、歴史的にどのように変遷したのかを明らかにするために、江戸時代から現代までを、江戸期、明治大正期、戦後期の3期に分け、各期の代表的な港湾を対象に分析した。

分析の結果、港とまちとを強く関連づける方法として、①港とまちの間に方向性をもつ軸線が形成されている、②港とまちの間に連続性をもった空間デザインがある、③まちから港あるいは港からまちへ意識と視線が集中する焦点がある、④まちの中で港を眺められる視点場が多様にある、⑤港湾施設そのものや港内ゾーニングに親しみを与える工夫がなされている、以上5点があげられた。江戸期にはこれら5つの側面すべてに工夫が見られ、港とまちの空間的関連が非常に強かったと考えられる。明治大正期になると近代的築港技術が導入され、大型船舶に対応した港湾が建設されたが、なかでも、方向性をもつ軸線が多様に強調され、港とまちの関連性を保っていた。戦後期では、重化学工業の生産基地等として、港は超大規模化し港とまちが離れたが、展望塔や高層ビルなどが視点場あるいは意識と視線の焦点となっており、港とまちは、立体化したかたちで、関連性を保っている。

【キーワード：港町、空間構成、K.J.法】

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

港は、従来港町における経済・文化活動の中心として重要な役割を果たし、住民にとっても非常に親密な空間となっていた。しかし現在の港の大部分は、まちと遊離し、住民にとって疎遠で著しく情緒性に欠けた空間となっている。昭和48年の港湾法の改正以来、住民に親しまれる港づくりとして、各種の緑地が配置されてきているが、今後さらに親しまれる港とするためには、背後のま

ちあるいはその住民行動と港との関連づけを、十分考慮した計画設計技法が要求されよう。

そこで本研究では、港とまちをより強く関連づけるための空間構成上の方法として、どのような方法があるのかを探るべく、港とまちの関連という視点で、港の姿を歴史的に辿ることとした。すなわち、まず港も小ぶりで港とまちの関連も極めて強かったと思われる江戸時代の港町を出発点に、そこでは港とまちを関連づける方法として、どんな特徴的なしくみや施設の態様があったのかを明

らかにする。ついで、そうした特徴的なしくみや施設の態様が、その後現在までどのように変遷してきたのかを辿ることにより、港とまちの関連づけの諸方法という面からみた今日の状況の位置づけを試みることにする。

(2) 研究の方法

1) 分析対象の港

ここでは、江戸時代を江戸期、明治時代から戦前までを明治大正期、戦後以降今日までを戦後期と呼ぶこととする。上記の目的のためには、各期の代表的な港を分析の対象とする必要がある。そこで、江戸期では日本名所風俗図絵、明治大正期では日本築港史、戦後期では新体系土木工学の港湾計画をそれぞれ主な出典として対象となる港を抽出した。各期の対象港湾数はそれぞれ130港、48港、13港である。

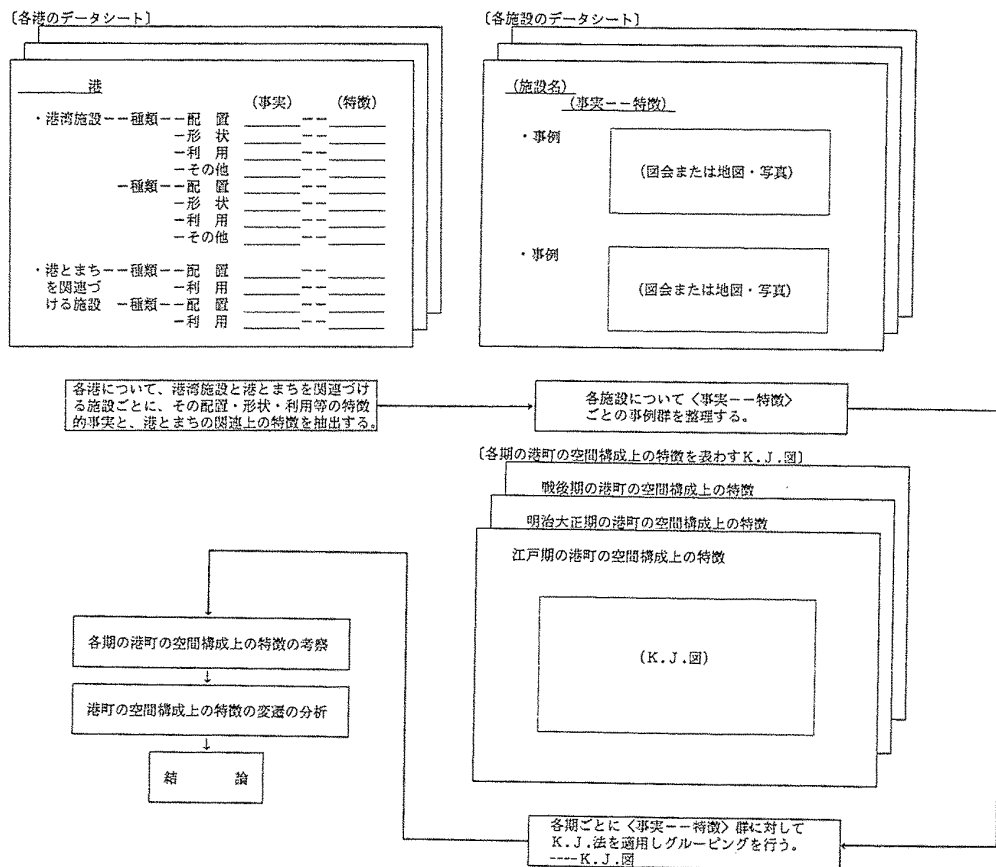
2) 分析内容

①各期の港町の空間構成上の特徴の分析

まず、各港の各施設ごとに、その配置・形状・利用のされ方などに関しての特徴的な事実と、そこからいえる港とまちの関連上の特徴を抽出し、各港のデータシートを作成する。次にそのデータシートをもとに各施設について、〈特徴的事実－港とまちの関連上の特徴〉およびそれを例証する事例群を整理し、各施設のデータシートを作成する。こうして得られる〈特徴的事実－港とまちの関連上の特徴〉の群に対してK.J.法を適用し、グルーピングを行う。こうして各期について作成されたK.J.図をもとに、各期の港町の空間構成上の特徴の考察を行う。

②港町の空間構成上の特徴の時系列的比較

各期について得られたK.J.図を順次比較検討することにより、期と期の間で何がどう変化していったかの変遷を分析する。なお、期と期の間



図－1. 分析の方法

変化をもたらした社会・経済・技術的要因についての分析も行ったが、紙数の都合により割愛する。

2. 江戸期の港町の空間構成上の特徴

先に示した方法によって分析していった結果、江戸期の港町からは、以下に示すような18項目の空間構成上の特徴が抽出され、これらの特徴的方法によって、港とまちの関連づけがなされていたといえる。これらの特徴的方法を分類すれば、大きくは〈連続・集中化の諸工夫〉と〈親密化の諸工夫〉に分けられ、さらに前者は〈方向性を与える〉、〈連続性を与える〉、〈焦点を設ける〉の3つに、また後者は〈多様な視点場をおく〉、〈施設とゾーニングに工夫する〉の2つの方法に分けられる。以下、これらについて順次説明する。

(1) まちから港へあるいは港からまちへ、意識・視線・行動が連続し、集中するように工夫されている

1) 方向性を与える

a) まちの中心あるいはまちの背後と港央との間に道路を結ぶことにより、まちから港へあるいは

港からまちへ、方向性をもつ軸線が形成されている。
(田辺港ほか26例)

2) 連続性を与える

b) 岸壁をスロープや階段にすることにより、親水性が付加されるとともに、まちから港へあるいは港からまちへ、心理的・行動的にスムーズな移行が促されている。

(下村ノ浦ほか31例)

c) 突堤の向きを港とまちを結ぶ軸線に一致させることにより、港とまちの間の方向の連続性が形成されている。
(歳島港ほか2例)

3) 焦点を設ける

d) 神社・鳥居・番所・日和山が港口(湾口・河口)にたつことにより、外海から港へ意識と視線が自然に集中するようになっている。またこれらには外海から港への「門=ゲート」としてのシンボルの意味も付与されている。

(大阪港ほか28例)

表-1. 分析の対象

期	対象港数	データ・情報の形態	出典
江戸期	130港	図会	日本名所風俗図会(全16巻) 他
明治大正期	48港	港湾計画平面図 港湾現況図 地形図	日本築港史 他
戦後期	13港	港湾計画平面図 土地利用図 地形図、写真	新体系土木工学-港湾計画- 各港湾計画書 各港パンフレット 他

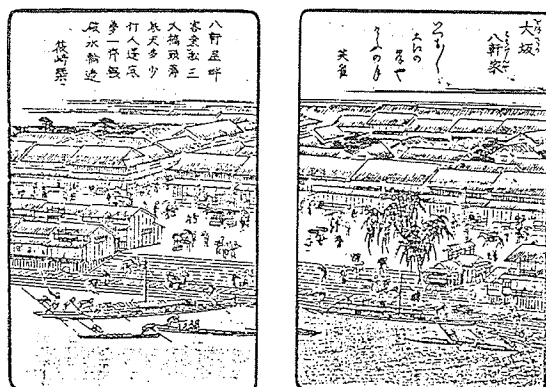


図-3. 大阪八軒屋-bの事例

出典:「日本名所風俗図会 11巻」

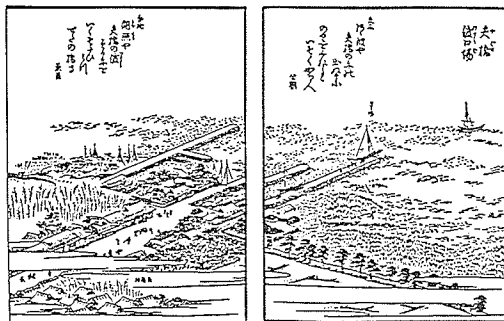


図-2. 矢橋港-a, cの事例

出典:「日本名所風俗図会 17巻」

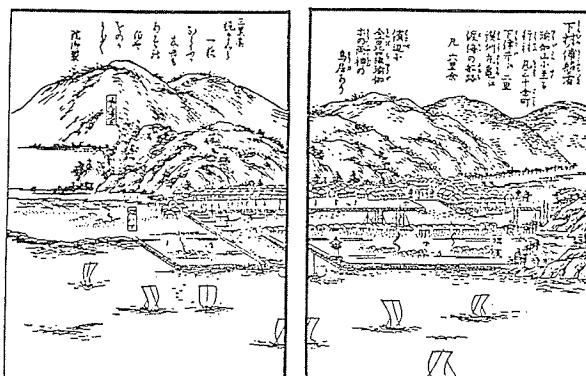


図-4. 下村ノ浦-b, e, f, gの事例

出典:「日本名所風俗図会 14巻」

e) 神社・鳥居が港央に、またまちに隣接してたつことにより、港からまちへ意識と視線が誘導され集中するようになっている。またこれらには港からまちへの「玄関＝エントランス」としてのシンボルの意味も付与されている。

(鹿島港ほか18例)

f) 常夜燈が神社・鳥居・番所・日和山の脇にたつことで、「門＝ゲート」や「玄関＝エントランス」のシンボルの意味が強調されている。

(香取港ほか15例)

なお、d)～f)は港からまちへ方向だけではなく、同時にまちから港へ意識と視線が集中する焦点ともなっている。

(2) 港が親密な空間となるように工夫されている

1) まちから多様に港を眺められる

g) 港に面した茶店など、港を添景としながら月見や夕涼みや飲食を楽しめる場所がある。

(高輪港ほか43例)

h) 小高い丘など、港を眺めながら遠望や花見や観潮を楽しめる場所がある。

(田口ノ浦ほか11例)

i) 橋上で祭見物や遠望を楽しみながら、また橋を渡りながら、間近に港の賑わいが眺められる。

(日本橋ほか9例)

2) 港湾施設そのものや港内ゾーニングに親密さを与える工夫がなされている

j) 防波堤や岸壁を湾曲させたり雁行させたりすることにより、よりヒューマンな規模・形状になっている。

(多度津港ほか45例)

k) 防波堤に松を植林することにより遊覧の対象としても親しまれる名所がつくられている。

(大阪港ほか4例)

l) 防波堤に物見台が設けられ、眺望の場としても利用されている。

(琉球港ほか1例)

m) 日和山が眺望・宴会・休息の場としても利用

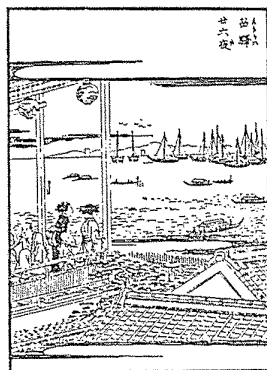
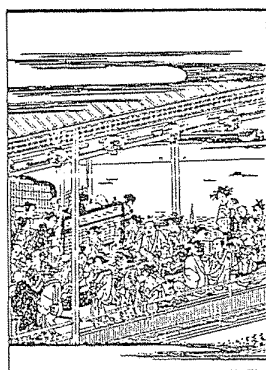


図-5. 江戸品駅-gの事例

出典：『日本名所風俗図会 3巻』

図-7. 大阪出見浜-nの事例

出典：『日本名所風俗図会 10巻』

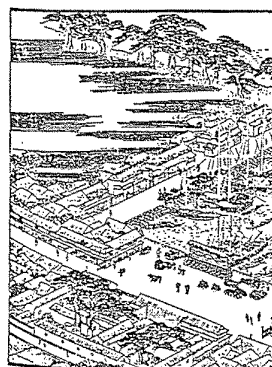


図-6. 多度津港-jの事例

出典：『日本名所風俗図会 14巻』

図-8. 高松西浜川口-rの事例

出典：『日本名所風俗図会 14巻』

されている。(大阪港ほか12例)

n) 常夜燈が展望台として人々に解放されており、港を眺め楽しむ場所となっている。(大阪港)

o) 泊地が解放され、人々の舟遊び(釣り・夕涼み・月見・花火・祭見物)の場所となっている。

(厳島港ほか27例)

p) 泊地で祭が催されている。

(広島港ほか9例)

q) 神社・鳥居が港央や河岸で港に向いてたっており、港内に神聖な空間が形成されている。

(高松港ほか18例)

r) 蔵・木場・渡船場・荷さばき地・船溜りがまちに隣接しておかれていることから、荷役作業や旅客の乗降あるいは船の停泊など港の諸活動を、まちから容易に眺め楽しめるようになっている。

(尾道港ほか48例)

3. 明治大正期の港町の空間構成上の特徴

先と同様の分析の結果、明治大正期の港町からは、以下の11項目の特徴が抽出された。

(1) まちから港へあるいは港からまちへ、意識・視線・行動が連続し、集中するように工夫されている

1) 方向性を与える

a) まちの中心(公園・県庁・駅等)あるいはまちの背後の山頂と、港央との間に道路を結んでひ

かれてることにより、まちから港へあるいは港からまちへ、方向性をもつ軸線が形成されている。

(野蒜港ほか17例)

b) 軸線となる道路に、歩道・街路樹・用水が併設されたり、港を意識したネーミングが行われることで軸線の方向性がより一層強調されている。

(横浜港ほか3例)

c) 鉄道や運河がまちの中心と港を結んでいることにより、まちから港へあるいは港からまちへ、方向性をもつ軸線が形成されている。

(大阪港ほか5例)

2) 連続性を与える

d) 岸壁をスロープや階段にすることにより、親水性が付加され、またまちから港へあるいは港からまちへの心理的・行動的にスムーズな移行が促されている。

(三角港ほか5例)

e) 突堤の向きを港とまちを結ぶ軸線に一致させることにより、港とまちの間の方向の連続性が形成されている。

(函館港ほか8例)

3) 焦点を設ける

f) 灯台が港口(湾口・河口)にたつことにより、外海から港へ意識と視線が集中するようになっていく。また外海から港への「門=ゲート」としてのシンボリックの意味も付与されている。

(横浜港ほか21例)

g) 税関などの役所が港央に、またまちに隣接し

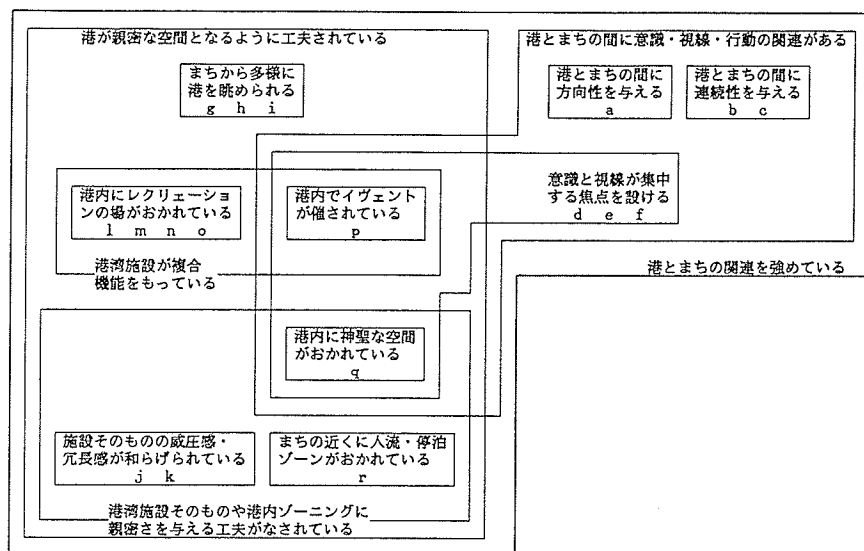


図-9. 江戸期の港町の空間構成上の特徴を表すK.J.図

てたつことにより、港からまちへ意識と視線が集中するようになっている。港からまちへの「玄関＝エントランス」としてのシンボルの意味も付与されている。

(大阪港ほか 4例)

なお、f)～g)は、同時にまちから港へ意識と視線が集中する焦点ともなっている。

(2) 港が親密な空間となるように工夫されている

1) まちから多様に港を眺められる

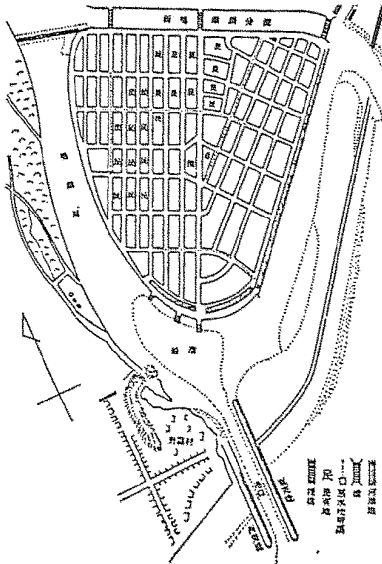


図-10. 野蒜港-a, eの事例

出典：明治15年の宮城県

野蒜港新市街地所払下公告」

h) 港を眺めながら遠望や花見を楽しめるような小高い丘がある。

(小樽港)

i) 橋上で遠望を楽しみながら、また橋を渡りながら、間近に港の賑わいが眺められる。

(釧路港ほか 2例)

2) 港湾施設そのものや港内ゾーニングに親密さを与える工夫がなされている

j) 防波堤や岸壁を湾曲させることにより、よりヒューマンな規模・形状になっている。

(野蒜港ほか 3例)

k) 泊地・旅客施設・船溜りがまちに隣接しておかれていることから、荷役作業や旅客の乗降あるいは船の停泊などの港の諸活動を、まちから容易に眺め楽しめるようになっている。

(長崎港ほか11例)

4. 戦後期の港町の空間構成上の特徴

戦後期については、以下の13項目の特徴が抽出された。

(1) まちから港へあるいは港からまちへ、意識・視線・行動が連続し、集中するように工夫されている

1) 方向性を与える

a) まちの中心(公園・県庁・駅等)と港央との間に道路で結ぶことにより、まちから港へあるいは港からまちへ、方向性をもつ軸線が形成されている。

(宮崎港ほか 3例)

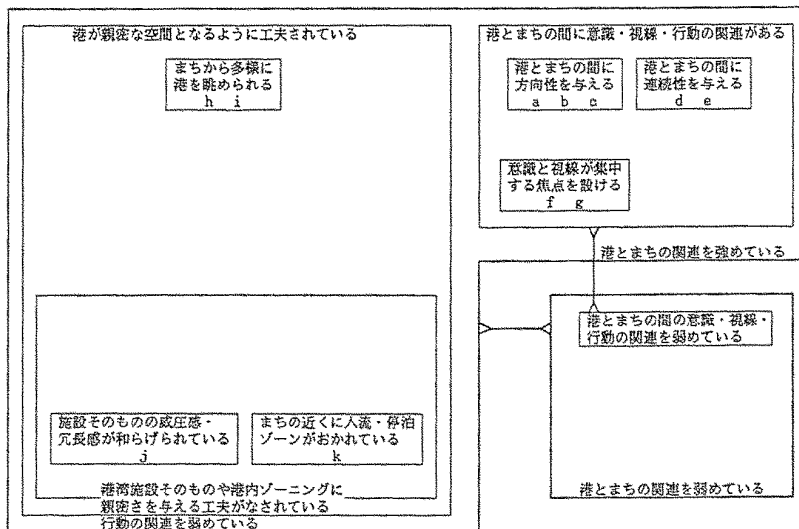


図-11. 明治大正期の港町の空間構成上の特徴を表すK.J.図

3) 焦点を設ける

b) 灯台が港口（湾口・河口）にたつことにより、外海から港へ意識と視線が集中するようになっている。また、外海から港への「門＝ゲート」としてのシンボリックの意味も付与されている。

（苫小牧港ほか 8例）

c) 港に面して展望塔がたつことにより、港からまちへ意識と視線が集中するようになっている。

（鹿島港ほか 4例）

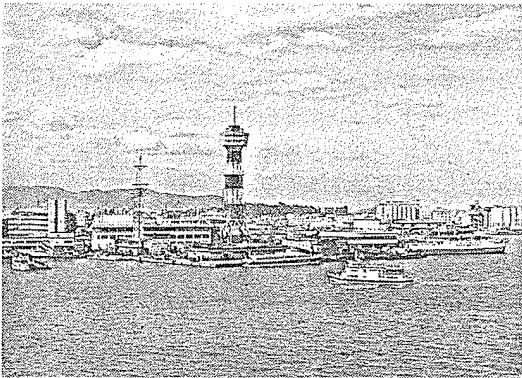
d) 港に面して高層ビルがたつことにより、港からまちへ意識と視線が集中するようになっている。

（大阪港ほか 4例）

（2）港が親密な空間となるように工夫されている

1) まちから多様に港を眺められる

e) 港を間近く俯瞰できる位置に高層ビルがたち、そこから港が眺められる。



写真－1. 博多港－c, hの事例

出典：「博多港ごあんない」



写真－2. 大阪港－kの事例

出典：「Port of Osaka」

f) 橋を渡りながら港の賑わいが眺められる。
（大阪港ほか 1例）

2) 港湾施設そのものや港内ゾーニングに親密さを与える工夫がされている

g) 岸壁を雁行させることで、よりヒューマンな規模・形状になっている。（苫小牧港ほか 1例）

h) 港に面して、港を眺めるための展望塔がたてられている。（鹿島港ほか 4例）

i) 休息やレクリエーションをしながら港を眺められる港湾緑地がある。（神戸港ほか 3例）

j) 港を眺め楽しむための港内遊覧船や見学船がある。（横浜港ほか 4例）

k) 港内にレクリエーションを楽しめるマリナー・人工ビーチ・海釣り施設・野鳥園などがある。

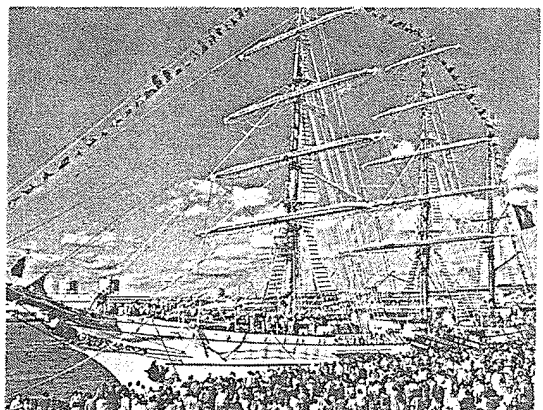
（大阪港ほか 5例）

l) 港内で祭や帆船見学会等のイベントが開催されている。（神戸港ほか 4例）

5. 港町の空間構成上の特徴の変遷

（1）各特徴ごとの変遷

以上の分析から明らかなように、港とまちを関連づける空間構成上の方法としては、時代によって具体的な方法やウェイトの差こそあれ、どの期にも共通して、〈方向性〉、〈連続性〉、〈焦点〉、〈多様な視点場〉、〈施設とゾーニング〉という5つの側面からの方法が必ずあったということが出来る。そこで、これらの各側面ごとに、江戸期から戦後期まで、どのような変遷があったのかをみてみると、次のとおりである。



写真－3. 大阪港－lの事例

出典：「Port of Osaka」

1) 港とまちの間に方向性を与える軸線

江戸期と明治大正期までは、港とまちの間に方向性を与える軸線が存在する例が数多く見られる。特に明治大正期では、軸線でまちの諸施設（公園・県庁・駅等）と港とが結ばれ、しかもその方向性を強調する手法もいくつか見られる。軸線はかなり強調されていたといえる。しかし戦後期になると、こうした特徴をもつ港はあまり見られなくなっている。

2) 港とまちに連続性を与える空間デザイン

江戸期では、岸壁をスロープあるいは階段にすることにより、港とまちをなめらかにつないでいる例が数多く見られる。明治大正期では、突堤の向きを軸線と一致させることによって連続性を与えている例が数多く見られるようになる。しかし戦後期の港になると、この特徴をもつものはほとんど見られなくなっている。

3) 意識と視線を集中させる焦点

江戸期では、神社・鳥居・番所・日和山等が、港からまちへ意識と視線を誘導する焦点となっている例が数多く見られる。これらは、外海から港へ入る際の「門＝ゲート」および港からまちへ入る際の「玄関＝エントランス」という2段階の構造を形成するようにおかれていたといえる。明治大正期と戦後期になるとほとんどの例で、専ら灯台が外海から港への「門＝ゲート」となり、「玄

関＝エントランス」としては、税関などの港関係の建築物や、港に近接するまちの側の建築物があらわれてくる。戦後期では特に、展望塔や高層ビルなどの塔状構造物が港からまちへ、あるいはまちから港へ意識と視線が集中する焦点となっている例が多い。

4) まちの中で港を眺められる視点場

江戸期では、茶店・小高い丘・橋上で月見・夕涼み・花見・宴会など、様々なレクリエーションをしながら港を眺めている例が数多く見られる。なお、明治大正期以降のそのような視点場あるいはレクリエーションの機会については、今回用いた資料からは不明である。

5) 港湾施設そのものや港内ゾーニングに親密さを与える工夫

江戸期では、岸壁や防波堤を湾曲・雁行させたり松を植林するなどして、港湾施設の冗長感や疎外感を和らげ、よりヒューマンな規模・形状になっている。また、日和山や常夜燈を展望台等として解放したり、泊地をレクリエーションの場として解放するなど、港湾施設が本来の港湾機能以外のレクリエーション機能をも複合的に備えることによって、親密さが与えられていた。また港の中に人々の信仰活動の対象となる神聖な空間がおかれていたり、まちから容易に船の停泊や乗客の乗降などを眺められるようにゾーニングされている

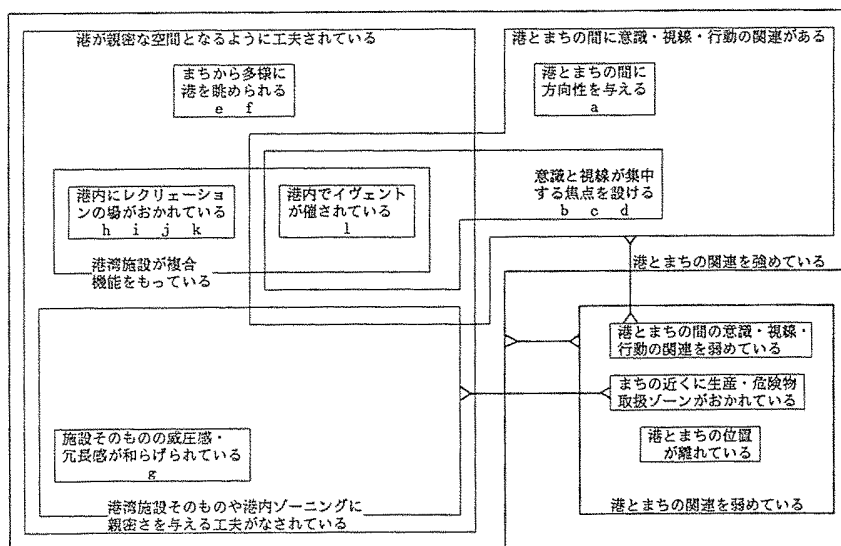


図-12. 戦後期の港町の空間構成上の特徴を表わすK.J.図

例も非常に多く見られる。明治大正期になると、わずかにゾーニングの面で、まちの近くに泊地等をおくという工夫が見られるぐらいである。戦後期では特に近年になって港内でのレクリエーションのために、展望塔・マリナー・人工ビーチ・港湾緑地等の施設が数多く見られるようになった。しかし、これらには、機能の複合化の工夫はあまり見られず、ほとんどはレクリエーションの単機能施設であって、しかも生産・危険物取扱ゾーンを介して、港表からはかなり離れた位置におかれている例が多く、レクリエーションとともに港の諸活動も間近に眺められるという工夫には乏しいかたちである。

(2) 港とまちの関連づけの強弱の変遷

江戸期には、①港からまちへあるいはまちから港へ、方向性を強調する軸線が通っており、②港とまちをなめらかにつなぐ連続性をもった空間デザインがあり、③港からまちへあるいはまちから港へ、意識と視線が集中する焦点があり、④まちの中で港を眺められる視点場が多様にあり、⑤港湾施設そのものや港内ゾーニングに親しみを与える工夫がなされていた。特に⑤については、港湾施設の規模・形状の冗長感と威圧感を和らげ、よりヒューマンな空間にする多様な工夫がなされていること、神聖な空間がおかれていること、港湾施設にはレクリエーション機能が複合的に付加されていることが、明治大正期以降と大きく違う特徴としてあげられる。このように江戸期では港もまちも小ぶりだったということもあって、①～⑤のすべての側面で工夫がなされ、港とまちの空間的関連性を密にしていたと考えられる。

明治大正期になると、②と⑤の側面が消極化し、あまり見られなくなっている。ただしその一方で、①の軸線を強調するという面での様々な手法が見られるようになり、これによって港とまちの関連

性を保ってきたといえる。

戦後期では港もまちも大型化したために、①と②の側面がほとんど消失している。しかし、その反面③と④については、展望塔や高層ビルなどの塔状構造物が意識と視線を集中させる焦点、あるいは港を眺める視点場となっている例も多く見られるようになり、港とまちは立体化したかたちで、関連性を保つ可能性をもつようになってきた。また⑤の側面についても、様々なレクリエーション施設が港内に導入され、人々を港へ誘導することが図られている。とはいえ、③～⑤の各側面とも、大型化・巨大化した戦後期の港とまちとの間に、親密な空間構成上の関連性を保持ないし回復するという面では、未だ十分効を奏したものはなっていないといわざるを得ない。

6. まとめ

以上の分析結果から、つぎの結論を得る。

1) わが国では江戸期以来、港町において港とまちとを強く関連づけるための空間構成上の方法として①方向性を与える、②連続性を与える、③焦点を設ける、④多様な視点場をおく、⑤港湾施設と港内ゾーニングに工夫する、という5つの方法が、なんらかの形でとられてきたといえる。

2) しかしながら、戦後期につくられてきた港では、種々の理由はあるにせよ、方向性や連続性を与えるための工夫は極めて不足したし、また焦点や多様な視点場を設けたり、港湾施設の種類・形状・レクリエーションとの複合利用や、親密さを与えるゾーニングを施す工夫の面でも、未だ格段の工夫が望まれる段階といえる。

3) 今後、港とまちの間に、より好ましい関連性の回復を図るためには、少なくともここで抽出された上記の5つの方法と、その技法の過去の事例をもとに、計画設計の技法として洗練し、用意しておくことが必要ではないだろうか。

参考文献

1. 「日本名所風俗図会 第1巻～第18巻」, 角川書店, 1980
2. 廣井勇, 「日本築港史」, 丸善, 1927. 5
3. 藤野慎吾・川崎芳一, 「新体系土木工学81・港湾計画」, 技報堂出版, 1981. 2
4. 港湾緑地景観計画調査報告書, 運輸省第二港湾建設局海域整備課, 1984. 3
5. 「日本の古地図7 港町」, 講談社, 1976. 11
6. 「日本の古地図14 長崎・平戸」, 講談社, 1977. 7